

巻 頭 言

保健管理センター長 小泉 順二

今年も保健管理センターの年報・紀要をお届けいたします。本年度は昨年度末にカウンセラーの准教授が転出され、カウンセラーが1人少ない状況での運営となりました。全学の皆様にも、内部にも何かとご迷惑をおかけしたこととお詫びいたします。現在、選考を進めており、近く新しい教員が補充できればと期待しております。本センターは学生の健康管理を出発点としていますが、現在は学生および教職員、本学のすべての構成員の健康管理にかかわるセンターとしての業務が期待されています。さらには、本センターの保健師が安全衛生の専門職員として活動し、医師教員が本学の産業医を務めており、安全衛生管理室と協働して広く安全衛生にかかわる業務への関与も期待されているところと思われます。これまで行われてきた学生への支援・相談への体制も、健康教育を含めて益々必要性が増加しています。新しく加わる予定のカウンセラー教員を含めた活動が期待される所であり、全学的な学生への支援・相談体制の明確化、組織化が望まれると思ひます。そのなかではすべての教員、事務職員等を含めた意識の高揚が望まれると思ひます。

これらの課題について、本年度の前半に2名の理事を含む保健管理センター在り方検討会で検討し、「中間まとめ」を行いました。このなかで多くの課題が指摘され、今後の関連する部署を含めた検討の発展が期待される所です。医療を含めた健康問題の体制においては多職種協働としての連携の在り方が注目され、各医療専門職の役割の議論も広がっています。平成20年には専門看護師や認定看護師の広告が可能となり、平成23年6月には看護師の役割拡大の方向で「特定看護師（仮称）の考え方（試案）」が“チーム医療推進のための看護業務検討ワーキンググループ”より提出され、11月には「看護師特定能力認証制度骨子（案）」が厚労省より提出されています。薬剤師も薬学6年制に伴い、医療システムのなかでの薬剤師の役割が検討されていると思われます。

多職種協働、チーム医療は医療界では流行語になっている感がありますが、その意味するところの解釈は個人で様々です。チーム医療の在り方のモデルとして、Multidisciplinary model、Interdisciplinary model、Transdisciplinary model の考えがあります。マルチディシプリナリー・モデルは、手術など治療が人命に関わる可能性がある緊急な課題を達成するために、医師の指示により、それぞれがチームの中で与えられた専門職としての役割を果たすことに重点を置いたチーム機能であり、インターディシプリナリー・モデルは、慢性疾患管理など、緊急性がなく、また、問題が複雑な課題を達成するために、各専門職が協働・連携してチームの中で果たすべき役割を分担する関係と定義されています。さらに、トランスディシプリナリー・モデルは、チームに課せられた課題を達成するために、各専門職がチームの中で果たすべき役割を、意図的・計画的に専門分野を超えて横断的に共有するモデルとされています。これまで医師のかかわる現場は、実情はともかく、組織的には医師を中心としたマルチディシプリナリー・モデル様のチーム体制がほとんどであったと思われます。しかし、これからは、保健師・看護職員も含めた、教員、職員を問わず、すべての構成員がインターディシプリナリー・モデルを意識した業務連携体制をこれから考えなければならないと思ひます。このようなモデルは医療のみならずすべての業務で考えられる所であり、大学としての目標達成のためには縦割りのシステムのみでなく、チームとしての協働モデルが望まれる所です。

さて、今年3.11の東日本大震災における大津波や原発事故に触れないわけにはいかないと思ひます。被

災された、また、いろいろと影響を被った人も多数おいでることと存じます。一刻も早い復興をお祈りするばかりですが、阪神・淡路大震災と異なり、広域で、人口密集地でなく、高齢過疎の地域での災害であり、今なお多くの課題をかかえています。阪神・淡路では瓦礫からの救出など急性対応が問題となりましたが、今回は慢性疾患の管理、亜急性の健康問題がクローズアップされたと思います。心臓・呼吸器疾患や高血圧、糖尿病などで治療を受けていた患者が様々な理由で重症化することが多く見られました。その後は放射線の健康への影響が懸念され多くの不安が世界全体に及んでいます。原子力発電所の安全管理の問題など、教訓とすべき事柄は多々あるように思われます。健康リスクへの対応を社会として、大学として真摯に考える時代となっています。放射線、喫煙、環境の問題、何が起こるかわからない行く先不透明な世の中など、不安、ストレスの材料には事欠かない状況です。大学を1つの地域社会、集団ととらえて、学生および教職員の皆様が安心して健康に学び、研究するなどが滞りなく行えるよう皆様と協働して努力したいと思います。

この年報・紀要は本センターの活動記録でもあります。2010年より新しくセンター内で事例検討会を開始し、2011年からは看護職ミーティングも定期的に行い、検討されたことを事務打ち合わせ会で共有するなどセンター内での協働の試みが始まっています。本年報・紀要を是非にご高覧いただき、本センターへのご提言、ご教示等いただければありがたいと思います。本誌を借りてこれまでのご厚情、ご協力に感謝するとともに、これからも本センターへの温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2011年12月